

特54

64

新編 浮城物語 巻之六



壹番目 鎮西八郎譚 六幕

(序幕) 首里城内球戯の場、裏山越密談の場
 返し(二幕目) 越來石橋祭禮の場、宮藏川新垣
 殺しの場(三幕目) 首里城内兇變の場、讀谷山
 一軒家の場、小龍球赤瀬濱の場、(四幕目) 南
 風原城夜廻りの場、同利勇居城酒宴の場、城
 内王子本館の場、同城外水門口の場(五幕目)
 越來山中一ツ家の場(六幕目) 大詰盤ヶ嶽天孫
 廟の場

中幕 一人道成寺

二番目 浮世清玄廓夜櫻 三幕

(序幕) 仲の町清水屋の場、江戸町入問屋の場
 (二幕目) 總泉寺裏庵室の場、入問屋奥二階の
 場(三幕目) 向島長命寺の場、同寺島新田の場
 總泉寺石地蔵の場、吾妻橋廣小路の場、同向
 川岸仇討の場

役割

宗寧王	長男鶴	牛島惣太	陶松壽	吉田屋松三郎	利勇	寺男六兵衛	武徳	中婦君	吉田屋多次右衛門市川壽美藏	命婦貞鶴	妖婦海棠	松壽妻千歳	入問屋の小櫻	島長林大夫	石濱佐内	正三品	寧王女	松井屋下女	新造	呂縁	松水寺清玄	若尾居露夕	清玄の亡霊	水車の定五郎				
中村時藏	片岡我童	關三十郎	岩井松之助	中村鶴五郎	中村相藏	尾上登美松	市川りう藏	尾上菊五郎	松井屋ノ娘お花	道具屋手代與一	尾上時五郎	北谷ぼゝア	紫巾官	ヤリチお爪	尾上松助	麗夫人	毛國鼎妻新垣	吉田屋姉お若	查國吉	次男龜	源ノ八郎爲朝	阿公	毛國鼎	白拍子花子	紫雲國師	八町齋喜平次	白拍子櫻子	中村芝翫

中幕道成寺の所化の役
 (以下略す) 名題惣出



○首里城内主殿の場 本舞臺前足の二重高欄附真中瓦
 殿口都々瑠球戯の場 官の体愛へ下官三人出来りて先年伊國
 の寶二ツの玉ヲ 失せ其落度めてお世嗣寧王女ゆり齋
 軒山の麓に御流をあられしと毛國鼎を探し出し國王へ捧
 げし事王女麗夫人が中城へ帰城せられしよりお國も
 素平だの中婦君にの兼てより紫巾官利勇殿と不義密會を
 せられるよしと云處へ(三十郎)利勇向ふより出来る愛へ
 與より(壽美藏)中婦君出るを見て下官皆々奥へ這入る中
 婦君の戀し仕打みて利勇の傍へ寄腹心の者より付奉ひ
 取し名玉が如何して毛國鼎の手に入りしや(利)此上ハ虬
 の墳より出現せし怪しの怪紫雲國師よ玉の見分けを頼み
 偽物といはれお夫を落度お麗夫人王女毛國鼎を自滅さ
 せんと密談の所へ向ふより(芝翫)の紫雲出来る上手より
 (我童)陶松壽權十郎(查國吉)出迎ひとして出来る與より
 (時藏)宗寧王出て座よ付中婦君の玉の箱を持出し明る(紫雲)
 玉を見て偽物ありト如意めて玉を割り其上毛國鼎

と麗夫人と密通し王女の彼が胤よして君が胤よわらず併
 し賀すべきの中婦人よ懐胎せられ左り孕の男子ありト
 聞(宗)扱の寧王女ハ毛國鼎が胤なりしと怒りヤヨ陶松壽
 查國吉の兩人毛國鼎を引立參れ(兩人)ハハアト先を愛ひ
 向ふへ欠行後宗寧王中婦君皆々紫雲を案内して奥へ這入
 る愛へ下手の床下より(猿十)北谷婆ア出来り樓子の聞ま
 した利勇様お預りやせし名玉を落しましたる其お詫よ余
 人が産し男子を盗み來て進せ升程よ(利勇)密に産處へ入
 子として王子御平産ト立(婆)國家を望む利勇様必らず
 入れ子を(利)首尾能頼むと手當金を渡し四方見廻し道具
 廻る

○裏山越密談の場 一面山組の道具岩壺陶松壽查國吉
 慶を掛真中(團十)毛國鼎木の根に腰を掛(陶)紫雲が空
 言利勇が讒言よて君を怒らせしゆへ歸城して此難を除け
 妻子を連れて當國を退參せられたしと師弟の親族の義を言
 毛國を助けんとするを(毛)我よ不義のあらざれ共天命お

して如何せん縦令此地を通るゝ共退手のため捕縛され君
お疑念を増よる(查)さりとして死地も同道せられんや(毛)
身等兩人我れを違立歸る時利勇中婦人此後心を許すま
國の爲も最期をとぐる外あしア同道仕らんと兩人が押
て止めるをかしむ名残も今日限り(陶)思ひあ
る師匠と弟子の身あて(查)思ひある君を討も忠義の(毛)
討る忠臣ト三人顔見合じつと思ひ入れ道具廻る

○本舞臺元の城内大官の体愛より以前の國士利勇中婦
君坐し上手は装雲大成る姿見へ邪法あて簾夫人と毛國鼎
と密會の様を寫し見せ又中婦人々懐胎の男子成り
と見せるより國司の益々信仰する處へ陶松壽奔國吉
よて毛國鼎を連れ出来るを國司の簾夫人と密會せし上
偽玉を以てわざとさしる(毛)此身お覺えこれあ
く君よの装雲と云ふ怪しき僧をお招きあり
俊臣利勇が上る事お用ひあるゆゑ國中の闇夜の如
しと諒育する國司怒り指令お隨ひ下官大勢出て毛國
鼎を取巻立廻りの末毛國の討れる後簾夫人王女

も參るまいと駕の戸を明る内より(國太郎)新垣のぞき見
て親おればこそ子おればこそ十二や十三であれぬ山路
と細とろき述て吳よト子と思ひ泣伏(つる)私し共の事
よりも父上様の御最期の無念でく成りませぬと云ふ時
新垣の頼氣も苦しむ鶴龜のうろくする處へ上手より(國
十)阿公出来り懐胎を聞いたはり乍腹をさすり左り孕
を見て悦び藥の用意が無くしてのあらぬと鶴龜お藥を
求め遣りし跡懐劍を抜其腹の男子を吳と云ふ新垣の
悔りし懐劍を抜身搦する阿公の切掛る兩人立廻りの
末新垣を切殺し腹を引割赤子を出し短刀を取上ハ
此國も見馴ぬ短刀をうやら覺へのト鞘お納め赤子
を抱き親の無とも子の育つ今切り口より産れたる赤
子にしてハ笑ひよて拍子幕

られしと此筋の演詞ある愛へ向ふより装雲國師様の
涉參殿と呼愛へ國司中婦人利勇出迎ひ装雲のまづくと上座
お腰を懸ける(利)王子貴々平産是を偏よ天孫氏の
涉血統をたやし玉はぬ國師の恵み此上り涉國も傳來
の琉と球どの名玉のツ紛失と探し出し王子へ附屬させ
ん(装)其玉を探し出すお及ばず返つて不吉禍の基ひ
なり(國司)其禍ひの何れお有る物や(装)國王無道ゆ
ゑ招かずとも禍ひと云ふ國の來るべしと装雲の袖の内
お印を結ぶト向ふより頭虎胸の牛ある獸物飛出し來
る下官大勢よてさへ止るを禍ひの荒まはり國王中婦
君を食殺し吳より首取ツとくハ出る是を見て(利勇)
妖僧よまどはされ残念中城へ立てハ王子を守護せんと
向ふハは入る跡装雲の幻術にて四人の下官を蘇生させ
身方付自ら法君と名乗此上の寧王女利勇を討取り呉れ
ん兩人早參れト呼是よて橋懸りより鶴龜の兩人出來り
父毛國を殺せし利勇松壽の奸計と聞き仇討をのぞむ
装雲の孝心を種よ遣ひ禍ひを先陣

の討手として松壽を差向毛國の妻子への查國吉を出張
させる兩人の立上る装雲のふつこり笑うヤンくよて幕
○石橋祭禮の場正面石橋遠見幟の書割都て祭の体愛へ下
官八人花笠を冠り揃ひの衣裳おて出來り何でも此道へ
寧王女が來るよ相違ねへと上手へ忍ぶ愛へ眞鶴寧王女の
兩人よて獅を冠り舞あがら出來り石橋お懸る折以前の
下官出て兩人を取巻眞鶴の王女を圍ひ立廻りの處へ松
壽出來りて下官を投げる眞鶴の深手に苦しみ私しの首を
切王女の身替りよしてト願ひ松壽の涙あがら眞鶴の首を
落す愛へ寧王女を助け查國吉が首を持ち出來り(查)何國
と當り定めぬと心當りの谷山ト首を松壽よ渡し王女を
連れ石橋を渡りは入る跡松壽の二ツの首を持ち立上るト
道具廻る○富藏川新垣殺の場 平舞臺一面河原遠見左
右杉の立樹都て夜の体愛へ向ふより子役の鶴龜兩人
して母新垣を駕お乗せ昇ぎ出來り(鶴)父上毛國鼎様不
量の涉難よて涉懐胎の母様をお連れ漸く愛迄ハ落來たゆ
ゑ(龜)も討手

として利勇を責討べしと云ふ鶴龜悦び立上る道具廻る

○讀谷山一軒家の場 本舞臺二重鏡幕家根丸木の柱破れ壁都て山中一軒家の体爰に查國吉居る處へ百性兩人出來り都の落人々隠れ居る事の事首里城くらさびしき浮陰謀ト云捨兩人の下手へは入る跡(查)扱ひ蒙雲此處に王女御座有るを知りし油断のさらぬと思案の處へ向ふより(團十郎(國太郎) 木樵の女夫柴を背負出來り三日の間歸へらぬゆゑお客人がお侍兼で有るよと内おは入る(查)兩入の歸宅を悦び(木樵)都の様子氣づのわしく夫を聞か参り二三日々を送りましたト都よて(蒙雲)ト云怪僧が禰いと云ふ獸物を遣ひ尙寧王中婦君も食殺ろされ首里の變動按司利勇の中城へ落のびし前幕の筋を物語るを寧王女の立聞奥より出給ひ(寧)そんなら父母共浮最期をとげられし(木樵)扱ひ退る浮令女の王女でありしのと平伏し蒙雲の千里眼とやらよて見遠すよし付此處は浮座有るの浮身の不爲是より小龍球へ渡られ赤瀬の渡り天孫氏が

立置れし碑みあり其石の影へ身をお隠し禰ひの難をさけたまへ(查)獸物のためは犬死するも残念さらば小舟お乗落のびんと云處へ以前の百性兩人切懸る夫婦の者兩人を投付殺し(樵)何を隠さん我々の此世を去りし毛國鼎が夫婦の亡魂成りト引抜亡靈の形ちどある大ドロくみて道具一時崩れ亡靈の消る(查)扱ひ毛國鼎浮夫婦の靈魂此士お此り王女の危難を救ひ下されしか(寧)死しても斯る忠臣を不便お事をト兩人顔見合山の方を拜ひ處めて道具廻る

○小龍球赤瀬の場 一面海原の遠見真中お大石碑女の像彫付あり都て濱渡部の体爰へ(壽美藏)島長出來り石碑を拜ひ處へドンくッパの音は胸り下手へは入跡以前の寧王女查國吉出來り石碑を拜す所へ下官大勢押來り兩人は驚る查國吉の禰ひと組打の末大立廻りとあり查國の討死をする跡禰ひの王女お飛懸る王女の石碑の廻りを廻る折しも不思議や石碑倒れ禰ひを押殺す爰へ下官押來

り王女お驚るト王女お神力乗うつり下官を投殺す立廻りの處へさしがねの矢飛來り下官を殺す是めて皆々逃る跡王女の氣絶をし倒れる爰へ(團十)爲朝出來り鐘の間より藥を出しよくませ活を入れる王女の心付爲朝を見て胸りサ、八郎様(爲)チ、先年見參せし寧王女よのあらざる(寧)思ひがけのふ此處で(爲)王女も堅固でト兩人捨石へ腰をかけ先年千坂の名鳥を爲朝へ送り玉を貰ひし始り首里蒙雲の怪僧利勇の奸悪毛國鼎の忠死亡靈お助けられし事より查國吉が討死の件を断し蒙雲退治の身方を頼む爰へ以前の島長出來りて神君の來られしと悦ぶ爲朝の忠臣をうんと查國吉を呼生し鎮西八郎爲朝寧王女お身方して蒙雲を討替國を平安お致し吳んと云皆々悦び查國吉の落人を幕

○南風原城夜廻りの場 本舞臺正面城中の扉を裏より見る模様爰へ下官四人夜廻りよ出來り日本國より爲朝様と云ふ強ひ大將が渡り按司と成られ我々も案心と云ふ處へ

下官三人よて賊が入り込井戸の中へ落氣絶をせしと鶴龜を荷ひ出來り繩を懸る處へ下手より龜童が來て是を留るを(下官)おのれも同類あらんと兩人を捕縛せんとする處へ上手より夜廻り検査として爲朝が出來り兩人を助け汝等の毛國鼎の悴おして仇を報る所存ならんと云ふ(鶴龜)驚ろさ如何おも親母の仇利勇は松壽を討ん所存(爲)さよあらず孝子を種よ偽仁義蒙雲が奸計めて利勇よ毛國鼎を討せしよ付父の仇の松壽おあらず蒙雲利勇ありト鶴龜の始めて聞仇討の手引を頼む利勇の當今同じ按司ゆゑ手引の出來ぬと云鶴龜の大事を知られしとて爲朝お切て驚る爲朝立廻りの末兩人の手練を見て其志さしを見る上り手引して仇討させん(鶴龜)の悦び四方よ心を付る道具廻る

○利勇居館酒宴の場 正面金襴左右唐花の張壁燈臺を照し都て居館庭先の体爰は利勇按司海棠女を傍へ引寄酒盛をする官士の踊りをおどつて居る處人松壽入り來り只今本館より王子の浮入りおムり升るト案内は利勇の胸りし

扱の阿公も参られんと侍女の酒宴の器を片付ける爰へ(團十)阿公王子を抱き出れり座より付王子様も禍のためお命を危うかりしをわらひが抱き参らせ身と松壽と三人あて當城迄落延對陣さすも早二ヶ年國相の位につく利勇様由断のムり升まいが日本より渡海せし爲朝が鷲巢山の古廟より連参りし素性も知れぬ海棠女をお愛しあつて酒宴の宜からぬ事と種々諫言する(利勇)大醉なしても性根を亂さず必らず案事あるかと云ふ阿君の案心の仕打よて奥へは入る後以前の海棠出来り利勇が寄添泣松壽の是を見て利勇を諫言するを怒り松壽を次へ引立ち呂線應雀の指令をする松壽の軍師に向つて無禮と争論の處へ其争い暫時と爲朝酌の仕打よて花車を引出來り利勇へ酒の味方をする松壽怒り爲朝と鳥渡立廻りとあり王子の許しあき内の本館に退散せぬと松壽の奥へは入る跡(爲朝)酒の相手をあし自分のよしと大音上げキア〜鶴龜此處へ出て本望遂よト詞の下は花籠の内より鶴

○中幕二人道成寺の場
本舞臺正面紅白の幕大鐘を釣わけ都て道成寺の体爰へ常磐津長明嚙子連中惣出來りよつれ三十郎、時藏、我童、福助、壽美藏、新藏、其外所化の拵らへみて出來りてきいた〜ウト笑しみの演詞渡るト向ふより團十郎の白拍子東の方芝翫の白拍子出來り花道よて所作ありてて兩人本舞臺へ來て鐘の供養よ参りましたと云ふ所化皆々兩人を見て悔り是より唄あり白拍子所作事ありトト團十郎鐘の内へ這入るト大鐘落るガ〜の鐘の音よ所化一同取巻鐘を引上ると蛇荒よ成る立廻りの末花道へ來る折向ふより芝翫の押戻し出て團十郎を押歸し皆々引つばりの見得にて拍子幕

龜の兩人劍を持出來る(爲)是ぞ先年身身の讒言よて無實の罪お世を去りし毛國が忘たみの鶴龜あり(利)扱の二人を手引して我を討せん手だてよちト劍を抜(鶴龜)積る恨みは仇敵と双方より懸り利勇の鶴龜に討れ倒れる此内爲朝の士官兩人を相手お立廻りて本望とげ兩人きつとなり此上の陶松壽を討とらんと鶴龜の上手へ入る跡以前海棠出來り鷲の巢山より連れ戻られ今利勇が討れし上のお傍よお置下されたしとすがり止める爲朝の鶴龜の身をおんと行んとするを海棠の爲朝の刀を取り逃んとするを(爲)我帯したる鶴の丸の名刀を目ざす不審と扱打よ切る是あてドロ〜成り海棠の消て上手の小高き處へ蒙雲國師顯れる(爲)扱の怪僧蒙雲よな(蒙)我幻術よて色におぼらせ汝を討らんと思ひし事からずとも早當城へ夜討を懸たれバ落城致すト聞爲朝の蒙雲よ切懸る鶴の丸の徳にて蒙雲消る遠寄よて道具廻る
○城内王子本館の場 正面命禰都て城内本館の体爰よ鶴

龜陶松壽を取巻(鶴)父の仇たる陶松壽(龜)敵と名乗勝負あせ(松)ヤレはやまるさ二人の兄弟毛國鼎を討たるの深き千細の有事ト裏山越めて毛國鼎お出會し我々軍王女麗夫人を守護せんためお後お残り毛國君お國家のため利勇よ討れし恨と思ひ我を討て望を達し吳よト云時純張の内より阿公顔を出す(鶴龜)の見留今のハ儘よ母の仇怪しの老婆よ相違さし今松壽殿のお物語りあて恨みのはれたり此上の助太刀して老婆を討せ下されたし(松)心得ふりと純張を卷上見て(松)扱の露顯と知り王子を連裏手の壁を破り逃うせたりと覺へたり身等二人の水門口よ心を付よ我の城内を探索せんと立上る遠寄の音よて道具廻る
○城外水門口の場 舞臺正面水門樋の口の体爰よ水門を明以前の阿公水濡衣裳亂髪にて出王子を抱(四方)見廻し抱子を懷中よ入れ錦の切れよて頬冠りをして花道よ懸る爰へ鶴龜双方より出來り無言場となりトト鶴を當阿公の

花道へ逃のび短刀を鞘ぐるみ投る鶴が請止める阿公の向ふへ逃入る跡は松壽出来り鶴も出會し鶴の氣絶を驚ろき介抱する鶴龜の阿公を逃せしを残念に思ひ入れりて幕

○越來山中一ツ家の場 舞臺中足の二重丸木の柱藪庇竹の本線都て山中のわづら家の休爰(松之助)千歳片眼盲目世話女房居る爰へ狩人辰平娘宗玖馬三人出来り爲朝夫婦が此邊へ落來らば間切の土官へ訴へる時の一生活々暮せるゆゑ見當り次第知らせてト云捨三人の下手へは入跡(千)夫の素性いあうさねと爲朝様が存命でお出聞の嬉しいが夫の身もと案事折一 大里按司爲朝の虎口の難を連れ出落行船も姑巴島よて再會あせ 舜天丸を伴ひ連て分入りしと爲朝舜天丸を連出来り一夜の舎り願ひたしと立すむ(千歳)家主の留守あから月さへ洩れる透間の風をかいとひなくばお貸すさんと云(爲朝)我々の小鳥よて確證を商ふ者あるが道は迷ひ難澁せしが跡より連の者が兩人參るとて門口へ目印又笠を出し座お付(千歳)湯を

出し大里按司とやらを詮議の爲よ所々新關を構へ装束より嚴しき達しト親子のそぶりも爲朝の刀は眼を付槍坂迄一ト走り往で參り升るもゑか客機跡を頼み升と瓢箪を持女房の出て行跡に捨丸の此家の様子心元あし早く此場よか立退られ(爲朝)賊あり共又の装束お訴人する共連の天よ任さんト大丈夫成爲朝の舎りの此家と(芝翫)の喜平次事王女を連出来り笠を目當み入り來り主従顔見合せ悦び(春)先刻此處へ參る道よて片眼の婦人よ出會此家よ座有るを知り其節落し行しゆゑ拾ひ參りし此札お一人田士と記せしの大里の割詞よして又五人の山賊夕語らししを聞よ何れも君を詮議の者共ゆゑ少しも早く此家を落のび給へと云爲朝の承知せず三人を與へ隠し跡は松のひでの火を消し何ひ居る爰へ向ふより陶松壽歸り來て内よ入千歳く扱の峯の嵐が吹込燈火を消しと見得るト勝手覺へし火打箱ト火を燈し爲朝と顔見合互ひは胸りや、八郎殿(爲)左様あると松壽で有りしうハ、アト(松壽)の

引さがり長川敗軍の後大將の行衛知らず君よの島袋にて狂火よ焼れ灰燼となりるひしと聞何卒装束が出るを伺ひ一ト太刀成り共恨まんと此山中お身を隠し時の來るを待しと云爲朝の松壽を疑り装束小一味し女房よ密計を授け訴人お遣りしが儘お證據と以前の札を出し一人田士の則ち大里の割字を以て訴人せしあらんと云爰へ捨丸王女春平次出来り拾ひし札を前へ差出し詰寄れバ松壽の腰お差たる一刀を前へ投出し女房の無念より疑念受し此松壽と鶴を以て頭を割死あんとするを爲朝止め此名刀よて女房を試し見べしと刀を渡す松壽の刀を取爲朝主従の奥へは入後松壽灯りを吹消し屏風の影へ隠れるト下手より以前の曲者三人追々お入り來るを松壽抜討お三人共切倒す跡へ女房千歳がサソ澤客人がお待兼で有るふと歸り來て内よ入るを松壽切掛る千歳の驚ろ氣が進ひしり我夫と瓢箪を以て受渡し立廻りの末ト千歳を切捨る爰へ爲朝主従 出来り松壽の潔白を賞し千歳の死體を見るよ何れ

へう消失たるより扱の装束が怪術あるのと傍お落ありし卒塔婆を見るお先妻眞鶴が卒塔婆を扱ひ此松壽を守護せんと眞鶴の亡靈ありしりと皆々不審の處へ三人の狩人兩人の悪者を縛り連來たり爲朝の家來お成らん事を願ふ松壽の之を許し今一度千歳が爰へまみへ我々を回向を受て成佛せよ南無阿彌陀佛ト拜むドロト成る千歳の妾障子よ寫る皆々回向をする事あつて幕

○大詰靈ヶ嶽天孫廟の場 正面山幕松杉の釣枝爰又龜の立懸り居るを野伏の悪者取巻首を渡せと立廻りの末龜賊を追のけ上手へ這入る後山幕落るト本舞臺真中天孫廟の宮上の方ろの大樹山又山の書割爰へ鶴弓を持出来り廟拜をし居る處へ人音するゆゑ鶴の仕打あつて立樹の裏へ隠れる跡東紀南吉の兩人出来り合圖をするト杉のうろの中より阿公王子を抱き出来り廟前よ腰打懸る爰へ大勢の野伏生首を持出し阿公の前へ備へる阿公の兼て八十一首持參致せとやせしよ一ツ不足ありと怒る王子の罪あさ者

の首を取るの好ましくらすと云これるを阿公打消し不足の首を討参れと云是は皆々下手へ遣入る後お向ふより野伏平頼安榮よて龜を引立來て阿公に見せる兩人顔見合(龜)サ、汝の母の仇阿公ならずやア龜ありしかト互ひお拘り阿公の手下は指令して龜の首を討落せと云ふ王子の止める平頼の刀を振わけ既切られんとする處へ矢飛來りて平頼のト矢は倒れるを見て龜の其刀を取り兩人を切殺す爰へ以前の鶴出來り兄弟顔見合せ悦び(鶴龜)母の敵と思ひしれと阿公お切て懸る阿公の兩人を相手よ立廻る「此内月隠れる闇夜とある阿公の王子をとらへ懐劍にて差殺す聲よ響き鶴龜何故王子を殺せしと阿公の肩先を切付る阿公暫時さて二人の孫今こそわろす我が素性抑我が父阿高の此國の曆々ありしが罪あつて流罪をかりしを我鬼界の島へ轉ね行しり世を去られしもある大隅の國よ渡り神道の奥義を授けしが彼の神明の祭りの夜旅寐の夢のくらすされ仇ある契り給ひしが又あふ迄の印しとて

男よりの短刀我よりの琉球の繪巻物を渡せしが何國の者とも名も知らず其後此國へ救免せられ本領の三ヶ一を賜り北谷の女王と呼ばれしが一夜の契りお懐胎し人あも知らせず産おとせし女子よしてある夜密に捨し時男が籃の九寸五分添置し籠めて打過しが欲にまよいて利勇は頼まれ身ごもり居る女を殺し子を奪ひ取得し刀の聲へ有る目貫に残る鶴龜の捨し娘が成長なし毛國鼎の妻とあり敵と眼ふ兄弟の我が孫あるうと知つたれり勇氣をためし見んためお殺せと云しかり又王子のと云し偽りよて實の鶴龜の弟ゆゑをいたり止し血筋のあんト語るお兄弟の驚き過世如何ある宿業あるうト兩人の差違ひ死さんとする時廟を開き中より出る松壽平治を改め(喜)珍らしや阿公殿名乗ねり我も知らねり身も知らし短刀を後のうたみよ渡せし此喜平治ありアノ時賞ひし書巻物の琉球國の繪巻物として八郎君が渡海の玉物あり宜くおがらへ居られしと聞え阿公の聲き喜平治よ取廻り扱も不思

義を再會と鶴龜喜平次愁歎の筋あつてト喜平次が介錯して阿公の首を落す爰へ玄武徳先よ三階惣出おて蒙雲退治のお味方致さんト大勢評議の處へ(爲)一同心を安んせよ蒙雲の術くぢけ首野を退散し龍宮城へつばみしと爲朝鐘形りあて出來り老婆がさんげよ事わりり天孫氏へ満願の賀をさ上げしりありて神の應護よ幻術くつけ退治おす事いと安し鶴龜松壽皆々が忠臣世お願れし今此時あり明あひすぐよ大軍おて龍宮城へ押寄ん方々よろこばしやト立上る拍子幕

○二番目序幕 本舞臺櫻の立樹都て仲の町清水や見せの休茶屋の女房と若イ衆辻裏屋を呼で居る爰へ(菊之助)松井屋の娘お花下女ト蕉の者を供に連出來り茶屋よ腰を掛仲の町の櫻を賞る(女房)お晰しのあつた吉田屋の若旦那へお懸入れのあるお顔さんてムり升るうト案内して皆々二階へ通る跡(松之助)傾城小櫻新造若イ者附添道中形りにて出來り清水屋へ上り智水寺の清玄さんハ四五日お出

がないと此筋の演詞有る向ふより我童吉田屋松三郎着流しよて續いて質屋の手代利兵衛小道具の手代與一出來りモン松さんくと呼かけ三人連よて舞臺へ來る小櫻の松三郎と見て此頃の無沙汰を恨む松三郎の氣兼して兩人の面目あき仕打是と女房が見てとり小櫻を連れて奥へは入(利)ニヶ月限りのお約束でお貸した百兩をお返しなくば青蓮の香合ハ此道具屋へ賣渡升る(與)私し廿二十兩利を付升る程おお拂下さい(松)袋直しお外方預り品ゆゑ流す事ハ出來ぬと日延を頼む兩人の承知して返る(松)アノ香合を流しての屋舖へ濟すと腕組をして居處へ(鶴五郎)帯刀羽織大小にて出來り殿より度々の涉値促ゆる香合の袋出來の上ハ早々上納致せ(松)暫時の日延と(帶)若明日納せらぬ其時よハ此帯刀上を偽る事よ至るぞト向ふへは入跡小櫻出てアノ香合を質入せし元ハといへハ妾お外のお客よ無心して有る氣をますすよいやさんせと云内以前の女房新造若イ者出來り小櫻の松三郎の手をとり

お坐敷へと皆々向ふへは入跡奥より娘花出来り恨めし氣
お小櫻と松之助の後を見送り道具廻る

○本舞臺江戸町入間屋小櫻部屋の体爰に松三郎蒲團の上
に坐し百兩の工風の出来ぬ内は如斯く居るも落付ず(小)
其お金の小梅より来る清玄さん頼みましたたが主と初客
の初より思ひ染たる戀中ト兩人思ひ入れ有る處へ(女房)
出来り大旦那がお出ふり升ト(松)親父お來られて(面
目ない)と上手障子の内へは入跡女房の案内にて(善美藏)
吉田屋多次衛衛門出来り松三郎が吉原通ひも若イ者ゆ
ゑ無利ありあらねと戀前の松井屋ト云地主より嫁を貰ふ
約束も濟婚禮の仕度も調ひし事ゆゑ梓の事思ひ切りと
ふを呼ぬやうよして下されや眼病も厭はずよ來ましたト
の頼みお小櫻も涙も呉る爰へ以前の女房出来り直お返事
も成り升まいと多次右衛門と連向ふへは入跡松三郎障子
の内より出来り今親父お若勞を懸るもかれゆゑト心配の
仕打小櫻のふさいで居る處へ新造が來てモッかいらんか

兄いさんがお出ふり成ました(小)一寸逢て來升り(松)ハ
ラ心掛りお百兩の(小)お金の清玄さん頼んだゆゑ安心
してお出あんと松三郎を引寄る道具替る

○本舞臺以前の二階積廻し座敷にて新造辻裏を見て居
る爰へ(菊五郎)清玄坊主墨黒の頭巾羽織着流し出て出来
るト待わびし体にて小櫻の出来り清玄お寄添お頼みやし
た百兩のお金を持って來て下さんした(清)不圖見染し其
日より百夜通へ枕をわさわねた主の心分ぬゆゑ(小)
そんなら嘘でんしたか(清)イヤく嘘のやさぬト云
時下手より(時藏)牛島惣太出来りイヤ嘘だ(清)ヤ、
小櫻の兄惣太殿(小)エ、嘘とはへ(惣)此清玄坊主の昨日
寺を追放された(清)小櫻の色香迷ひ師の坊より勘當
受しが是非一度情けを受ぬ其内の死すとも浮べぬゆゑ
今宵限り得心さして呉ると小櫻の傍へ寄る(小櫻)たまへ
の頼みところじやあいつ突放し立上る清玄の残念がり引止
るを惣太が清玄の首筋を引戻す小櫻の振拂ひ與へ遊ゆ

跡よ若イ者大勢出て清玄を打擲するを惣太が止若者を連
替々下手へは入後清玄の涙を流し居處へ禿みどりガ鹽湯
を盆へのせ持來りだす(清)子供ハ正直お物じや今ハ嵐に
散果たる此清玄ト盆を抱へひせび泣いて道具廻る

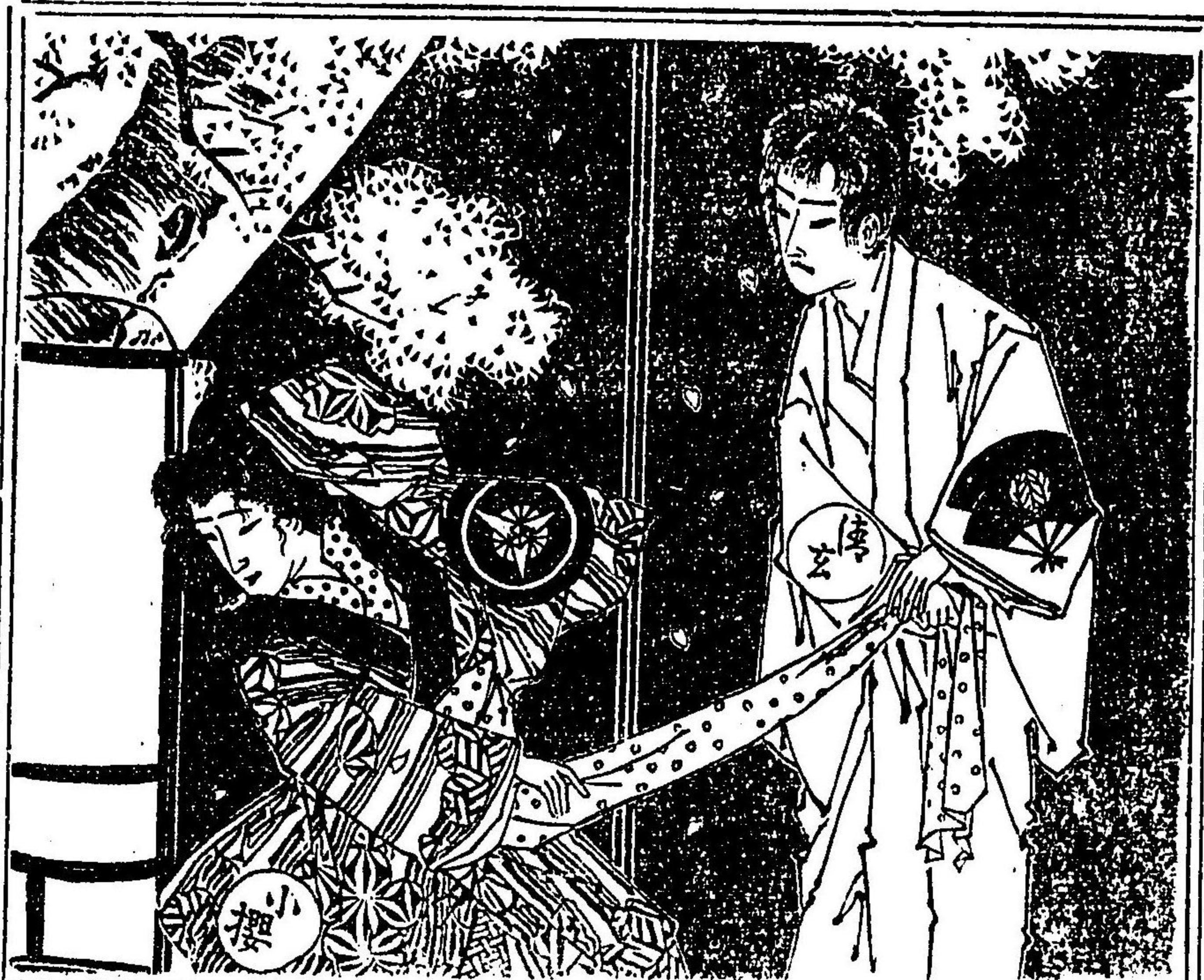
○本舞臺元の小櫻部屋の場は扉風を建廻しある爰へ新造
出来りて扉風を明るト蒲團の上よ小櫻松三郎居て清玄殿
へ頼みし百兩が違ひしゆゑ香合の受戻しけあらず此上の
死か外お思案のなしと涙にくれ髪刀を取出し死かんとす
る處へ(國太郎)姉お若死よ及ばず兩人暫時くと出来り松
井家の娘お花々此文は百兩の金子を私し方へ届られ入
間屋へ持參をして呉との頼みゆゑ先刻々次の間にて委細
の事聞きましたと文を出し讀み清木屋にて質屋に百兩の
お金を催促されし事を聞し儘此金を送り升と此筋の文言
よ拘りし(松)扱ひ清水屋の二階よ居たりしい郎の客よわ
らすしてお花で有しのと兩人面も目も仕打是か姉が頼み
お花の篤志を思ひ小櫻松三郎の縁切の別あり松三郎の姉

と親父は連られ小櫻お別れをつげ皆々向ふへ歸る小櫻ハ
松三郎の後見送り泣伏處へ上手より清玄出来り小櫻をと
らへ(清)何卒情トや小櫻との私と一處お寐て下され(小)
思ふお方よ別れしとして伊出家の身じやムんせぬか此處放
して下さんせと逃るを追廻る爰へ若イ者大勢出来り清玄
を突倒す小櫻の奥へ遊行を飛懸り袖あすがる片袖清玄の
手よ残る跡若イ者清玄を引ずり下手へは入後惣太出来り
子僧殺の思足を清玄よ見られしゆゑ一時のかげつたトや
りてお瓜お断し道具廻る

○本舞臺前側一面大格子大間口都て入間屋表懸り雨中の
体爰へ若イ者清玄を引ずり出し突倒し戸を一切清玄漸々
起上り顔を握む血の出る苦痛ト衣の破しを無念の仕打
エ、降來りしクト傘を持立上り二階を白眼破れ小袖お破
れ傘斯いふ姿も成行しも是も離ゆゑト片袖を出し「小櫻
ゆゑト悔しき心残りの思入れおてアモ薄情な人でなしめ
ガト本釣鐘風の香櫻の花が散片袖と白眼で幕

と親父は連られ小櫻お別れをつげ皆々向ふへ歸る小櫻ハ
松三郎の後見送り泣伏處へ上手より清玄出来り小櫻をと
らへ(清)何卒情トや小櫻との私と一處お寐て下され(小)
思ふお方よ別れしとして伊出家の身じやムんせぬか此處放
して下さんせと逃るを追廻る爰へ若イ者大勢出来り清玄
を突倒す小櫻の奥へ遊行を飛懸り袖あすがる片袖清玄の
手よ残る跡若イ者清玄を引ずり下手へは入後惣太出来り
子僧殺の思足を清玄よ見られしゆゑ一時のかげつたトや
りてお瓜お断し道具廻る

○二幕日本舞臺總泉寺裏庵室下手柳の立樹古びたる井戸
 都て清玄庵室の体長家の女房お針米をときながら吉原の
 断をする愛へ(壽美藏)紙屑買嘉佐七出来り取引をする傘
 屋の世話でお磯前の吉田屋さんへ悴と小僧又遣つて置た
 處跡の月向島へお例へ行た歸りよ小梅の土手で悪者に殺
 され金を取れ其上三年跡お女房お死れケつゝのり仕ました
 と聞(女)それにお氣の毒お事でも有ましたねト長屋の女露
 次の内に遁入(嘉)清玄機の病氣の如何おとは入正面の
 障子を明ると清玄いが栗坊主鼠の古着病人の体よて蒲團
 の上よ座し度々の見舞を悦喜嘉佐七の破れたる入間屋の
 傘よ眼を付此破れ傘おての雨のためお成ませぬと古傘を
 出し取替お大事お成れましと嘉佐七の下手へ歸る後向ふ
 へ(三十郎)寺男六兵衛赤坂田町小櫻の菓子持て出来り清
 玄の前よ出し病氣の養体を聞清玄の小櫻ト云菓子やの名
 を聞悦ふ(六)此菓子の小櫻を見てお悦びでいまだ後悔必
 の成されませぬうた身様の親御の千葉の湯家中大江彈正



機珍謀叛お荷贖成されしより死罪お處せられ奥様の御自
 害遊べし夫ゆゑ誓水寺の湯弟子と成られし御身お破戒
 墮落の身と成れし此お姿と泪おぐら肩を揉ハテもふ日か
 くれるとふなト愛へ嘉佐七出来り跡の私しが世話をして
 上行程お小梅迄の拾丁余(六)左様おればお暇致し升と立
 上る(清)コレ六兵衛おあなたの世話の死でも忘れお致さぬ
 ぞ(六)お大事お成れましと(嘉)行燈をともし下手へ遁入
 後清玄の片袖を取出し寐ても覺ても小櫻の只像が目前
 よ見へ忘れおたるき因果の身の上師の恩を忘却おしたる
 此身の罰見るもいふせき破布子乞食坊主同様に委ふるつ
 たも小櫻おゑト片袖を抱お兼様とするト道具廻る
 ○本舞臺元の小櫻部屋夜の体愛に小櫻松三郎並び居て
 此程お花の志さしめて受戻したる香合を邸へ差上し偽偽
 物とて邸おさげられ質屋へ掛合せし處箱入の儘預りし品
 ゆゑよ知ぬとの返事夫ゆゑ香合詮議の爲上方筋へ出立す
 るおゑ是ケ永い別れお成ふも知すト兩人愁の仕打愛へ以

前の物太出来り悪ひ事よの抜眼のねへ此物太其香合の私
 が詮議をして上行程よ拾兩の金を貸て下せい(松)金とヤ
 して手元よ(物)金お出来すバ千葉の重役岩淵様へ貸入
 おせし事をナ立様の(松)夫斗り(物)金を貸り(小櫻)兄
 さんは持て歸んおさんせと拾兩を投出す物太の悦び金を
 請取下手へは入後禿お出来り小紫の花魁が若旦那少し
 用が有んすから鳥渡来てトの禿の迎ひお松三郎の奥へ行
 後よ小櫻の香合の手違も清玄さんの思ひでい有まいたと
 思案の折しもドロくお成清玄の生露顯れるよ小櫻の胸
 りし沁んとする(清)此儘死す共浮バれお懸よ焦れて疲
 衰へいやでも有うの清玄お思ひを晴して下されと抱付く
 小櫻のアレエト氣絶する清玄の消る聲お驚き松三郎惣太
 お爪出来り小櫻を見て悔りし呼生す小櫻の蘇生り四方見
 廻し今清玄よ挑まれし事を云(物)橋場の庵室で病中の清
 玄お来る筈いねへお扱の坊主の生靈う已の清玄の様子を
 見て来ると立出る(爪)そんならおつき障子の外に立て居

たのり清玄さんのト皆々ぞつとする思ひ入りて皆々奥へ
は入後松三郎の四邊見廻し浮世の義理も別れぬや成ぬ
(小)別れともムんせぬト絶り歎く(松)親の命も返られぬ
と振切る道具廻る

○本舞臺元の庵室の場は清玄蒲團を抱へうなされ居るを
嘉佐七が油をさしよ出来り聲を聞ゆり起す清玄、眼を覺
し小櫻と思ひの外夢で有しものと四邊見廻す嘉佐七の意
見して露次の内へは入跡向ふ物太脇差を差出来り妹よ
思ひ掛るのを止て呉る(清)騒へ死でも思ひ切れぬ(惣)エ
、強情坊主だナアと傘を振上る(清)エ、思知らずめが
(惣)何已を思知すだ(清)小梅堤で吉田屋の梅松を殺し金
を取し悪人物太僧の身故も訴人もせず生し置しが此上の
親嘉佐七の告化を討せん(惣)夫故今夜殺しよ来たのだ一
刀を引抜切掛る清玄の傘よて受止め疲れし足を立直し兩
人立廻りの處へヤリテお爪出来り薪めて清玄の顔と突惣
太が肩先を切込清玄の虚空を掴んで今思ひ知して呉ん

ト苦む思ひ入りて倒れる(惣太)血刀を拭ひ花道お懸るト
風の音おてドロくよなり清玄の死体ぬつくと立て青火
燃る兩人驚き下居敷嘉佐七出て兩人の後影を見詰る
兩人向ふへ送返幕

○三幕日向島長命寺前夜櫻見物の体爰へ入間屋の若い者
六人出来り小櫻さんご送出て行衛が知ぬと手紙を拾ひ淨
瑠理名題を讀上六人下手へ遣入ト清元延壽出語り「月影
も花も木の間お角田川水も影うく夜櫻をトお花娘形りよ
て下女を遣出来り(花)松三郎様ハ未小櫻さんにお心ご有
様子(下女)此節でハ斷然小櫻さんを思ひお切成れ生娘よ
限ると此程お惣氣で有升たサア伊夫婦でお舟でお歸り成
れ升と云爰へ(三十郎)髮結の鳥羽七出来り酒樽嫌めて下
女も戯れる事有て追掛る下女のお花の手を引鳥羽七を突
退上手へは入跡よ出茶屋の影お小櫻出来り(小)今のハ儘
に藏前の松屋の娘お花さんで有たるりと聲を聞付(鳥羽
七)サアお前の小櫻さん(小)お前の鳥羽七さんどふして

此處(鳥)今日の若旦那のお供たがお前の前で云憎ひ
が伊夫婦中が宜過る故と是方振事よて小櫻も惣氣とさせ
笑ひ乍ら向ふへは入後(小)エ、水臭い松三郎さん一ト目
逢たく廊を抜出て来たういも無死ぬる時節が来た事か跡
を追手の懸ぬ内チ、そらトやと投身んと爲所(菊五郎)
伊勢屋宗兵衛が抱留る(小)何卒殺して(宗)私り寺島も隠
居する者故先内へ来て委細の分を聞せ升ト小櫻を連東の
歩より花道へ廻る「此内舞臺の道具廻る

○正面本線附都て向島別荘の体宗兵衛の小櫻を連枝折戸
を明内へ入ト奥方(登美松)下女出来り旦那様お歸り成れ
升(宗)今土手で此婦人を助けて来た(下女)チヤ小櫻さん
でハムリ升ぬり先お上り成れ升(小)有難ムムリ升と下座
お手を突松三郎の心替りか死ぬ氣お成飛込處をお助け被
下し(宗)心替りの男お情を立るも無易なり私の人を助
けるが何々の好此上の身受をして情夫が有る添して還
ム己も獨身故女房お成ちら今河直ト心切お詞お小櫻の

悦びた心に随ひ升る故身請成れてお傍にお遣ひ被下升と
嬉々仕打よ宗兵衛の悦び小櫻の手を採奥へは入後向ふ
惣太トお爪出来り小櫻の行衛が知ぬが向ふの内提灯の
火を借牛島邊を採して見様と兩人枝折戸の内入小櫻の
上草履を見てヤア小櫻の此お内お来て居ると見得ると云
時奥方小櫻出て兄さん宜来て下さんした此家の旦那さん
お助られし上身請をして下されると結構お仰せ(惣)夫の
何有難少旦那よお目お懸り度(宗)今面會致し升と
宗兵衛出来る顔を見て悔りしお爪の惣太の袖を引幽霊だ
と慄々振へる小櫻の身請の相談に悦ぶ此處都て菊五郎の
顔小櫻の方へ見せる片側ハ宗兵衛おて左顔の都て青ざめ
血だらけ成り仕懸よて清玄の顔に見得るニタ面幽霊の仕
打よて然ハ三百兩の見請の金を今參持して渡さんと奥へ
は入跡に惣太お爪の顔見合胸を撫下し橋場を殺し清玄の
亡靈成と氣味悪氣仕打の處へ下女の巾紗包を持出し身受
の金三百兩サアお受取被下と出すを恐怖惣太が明て見る

の金三百兩サアお受取被下と出すを恐怖惣太が明て見る

と小櫻の片袖故皆々驚き逃んとする處へ上手の障子紙仕掛めて開くと清玄の亡霊ドロ／＼にて立上り小櫻始め恨み重る己ら三人生替り死替り取殺さいで置べきかと三人を引寄ると道具居處は替る

○本舞臺左右敷疊正面辻堂都て橋場總泉寺原中の体爰へ螺頭れ辻堂の中へ入ると内より小櫻出扱ひ今の夢で有し清玄様は此身は附添居る事なりテモ恐敷見附られての身の大事と辻堂の内へ隠れると向ふ方惣太出来り吉田屋の丁雅を殺した清玄が知て居る故坊主を殺したか晝夜とさく見得るとの執念深い奴だ此上又奥州筋へ高飛を仕様ると本舞臺へ来る辻堂より小櫻出て兄さんでい無かと云を清玄と思ひ一刀小櫻を切倒す處へ爪が駈来り何故妹を殺されしやと云を又清玄と見得る方爪を切殺し扱も執念深い清玄と月明おて兩人の死體を見て悔りし是も祟りの爲事と立上る處へ上手の敷方松三郎出来り惣太の腰を引戻すと向方(菊五郎)驚の者定五郎出来り三人世話無言にて惣太花道へ逃ると幕

○平舞臺町家の遠見都て東橋方廣小路を見たる体爰は若

イ者六人入問屋と云提灯を持小櫻の行衛を尋ね上手へは入跡松三郎出来り香合の行衛の知すと小櫻爪の殺されしも清玄殿の祟成んと石地藏の後へ隠れる跡爰へ番頭利兵衛與市出来り松三郎が巻上し香合上方筋へ賣渡さんト云爰へ松三郎出て其品渡せト三人立廻りの處へ木魚擔大勢出来り入交り混同の立廻りと成水車の定五郎駈来り松三郎を助け立廻り道具廻る

○本舞臺黒堀見越の松都て吾妻橋向川岸の体爰は惣太一本差六兵衛立懸り居(一)主人清玄様の敵覺期致せ(惣)如何も清玄と小梅まで子僧殺しも此惣太ト云時向ふ方柵を持嘉佐七駈来り悴の仇勝負／＼と詰寄る立廻りの末惣太切倒される處へ松三郎番頭兩人と立廻り乍出来りトト兩人を切捨懐中と探見て香合の無驚く處へ定五郎香合を待出来り(定)香合のお渡しし又小櫻殿の淺手まで一命お別條(松)何小櫻が助かりしト(一)悪人亡び(嘉)善人榮へ(定)此香合の手入るし目出度く先今板の是さきり

○明治十七年三月廿五日御届濟 定價金七錢
淺草區猿若町二丁目十一番地平民
編輯兼出版人 大木嘉吉
同 發 兌 元 新 板 堂